

令和 6 年 5 月 21 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19H01276

研究課題名（和文）多層言語環境における第二言語話者像 トランスランゲージング志向の会話方略

研究課題名（英文）L2 speakers in multi-layered language environments: Translanguaging conversation strategies

研究代表者

河合 靖（KAWAI, Yasushi）

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・特任教授

研究者番号：60271699

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,300,000円

研究成果の概要（和文）：世界的規模の多層言語環境化で、場面・状況に応じて言語資源を選ぶ複言語主義的言語運用（トランスランゲージング）が求められるが、二言語併用の実態やそれへの反応に関する研究は限定的である。本研究では、トランスリンガル文学、言文不一致言語、言語簡略化、教室内言語活動、高度バイリンガル動画などでの言語運用を考察し、また、トランスランゲージングに対する第二言語学習者の反応を調査した。さらに、そうした言語経験の活用を英語教育・中国語教育を事例に検討した。共同体構成員の多様化や教室内言語活動の進化に伴い、トランスランゲージングの拡大と受容的傾向が見られるが、モノリンガル母語話者規範への偏りもまだ根深く存在する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義として、トランスランゲージング（TL）活用による批判的思考力や内的思考の発達（佐野、2024）、言文不一致言語の学習でのTLテキスト活用（飯田、2024）、言語簡略化と国際語としてのディスコースの結びつき（大友、2024）、協働学習での自発的なTL（酒井、2024）、国際共修授業参加と自己認識の変容（三ツ木、2024）、AI支援によるプロジェクト型外国語学習とICT技能への認知的変容（杉江、2024）、高度バイリンガルのTLの特徴と日本人英語学習者が感じる違和感（河合・山田・小林、2024）などの気づきを得た。社会的意義としては、TLへの知見が仲介者資質検討の手がかりとなると考える。

研究成果の概要（英文）：As the multi-layered linguistic environment expands on a global scale, plurilingualist language use (translanguaging) is required. In this language use, linguistic resources are selected according to the situation and the context. Yet, research on actual translanguaging language use and the response to it is limited. In this study, we examined language use in translingual literature, spoken-written discordant language, language simplification, classroom language activities, and highly bilingual videos. Then we investigated the responses of second language learners to translanguaging. In addition, we examined the application of such language experience to English and Chinese education. With the diversification of community membership and the evolution of classroom language activities, an expansion of translanguaging and a receptive tendency towards it can be seen, but there is still a strong belief in monolingual native speaker standards.

研究分野：応用言語学

キーワード：多層言語環境社会 トランスランゲージング 言語混交会話方略 母語話者評価 第二言語話者像

1. 研究開始当初の背景

申請者は、本研究に先立ち、2015～2017年度科研費基盤研究(B)(一般)「東アジア圏の複言語主義共同体の構築—多言語社会香港からの示唆」(研究代表者河合靖、課題番号15H03221)を実施していた。これは、多層言語環境研究科研グループの最初の共同研究であった。この間、外国人人口が劇的な増加傾向にあることは、各種統計(法務省在留外国人統計、総務省統計局国勢調査、出入国管理統計表、国土交通省観光庁統計情報・白書等)から明らかであったし、国立社会保障・人口問題研究所(2015)や内閣府高齢社会白書(2017)が予測する高度少子高齢化社会の到来により労働者不足がもたらされれば、外国人労働力によるその補てんが進行することは明白であった。また、「明日の日本を支える観光ビジョン構想会議」(2016)で訪日外国人旅行者の増加目標が示され、短期在留者増加も今後さらに加速されることが予想された。外国人在留者の増加は、国内の言語使用の多様化を意味する。日本の多層言語環境化は無視できない事実であり、多層言語環境研究の最終的な目的は多様社会に対応する人材の育成である。

「多層言語環境」という用語の使用には、モノリンガル、バイリンガル、マルチリンガルの住民が、さまざまな言語種あるいは熟達度の組み合わせで入り組んで住みながら接触する様子を実際立たせる意図があった。そうした社会の代表はヨーロッパの複言語主義的な言語環境であり、そこでは、コミュニケーションの相手や目的、状況に応じて、自分の言語レパートリーから言語資源を選んで用いる(トランスランゲージング)複数言語併用(トランスリンガル)話者が求められている。これは、第二言語学習の目標モデルが、モノリンガル母語話者からバイリンガル・マルチリンガル第二言語話者に変更されることを意味する。

最初の多層言語環境研究科研においては、多言語社会香港を対象に、日本語及び香港の使用言語である広東語の文末表現の特徴から見る東アジア圏の言語的共通性や(飯田, 2018)、学校教育における言語政策の変遷(横山, 2017)、住民の多言語能力獲得に対する意欲の高さ(佐野, 2017)を考察した。また、それを参考にしながら、学生間の言語交換・言語交流による日本人英語学習者の変容(河合・河合, 2017; 杉江, 2016; Sugie & Mitsugi, 2016)が考察されて行ったが、ヨーロッパの複言語主義的な第二言語話者を日本において育成する道筋がこの研究により現実的なものとして見えたわけではなかった。グローバル化に伴う日本の国際的な生き残り戦略における日本人の英語力の向上、つまり「英語が話せる日本人育成のための行動計画」(文部科学省, 2003)に沿う高度な英語熟達度を持った人材育成への示唆が、この科研共同研究の貢献と言える。つまり、英語学習者の到達目標モデルは、モノリンガル英語母語話者のままであったと言える。

最初の多層言語環境研究は、日本語を単一言語として使う島国日本は、英語運用能力の獲得に不利な環境であって、グローバル化する世界で日本が生き残るためには、この状況を打破する革新的英語教育が求められるという考え方を基にして発想されていた。しかし、香港、台湾などの東アジアの研究者との交流から、日本が歴史的に単一言語使用地域であったという認識は誤謬であると気づかされた。明治後半から終戦までの半世紀の間、実際には日本は言語多様性に富んだ多層言語環境社会であった。朝鮮語や中国語、台湾の原住民諸語、あるいは南洋諸語の母語話者を「国内」に多数抱えていたし、北海道や沖縄にもアイヌ語や沖縄諸語の母語話者がまだ多く存在していた。

島国の言語環境が、日本人が第二言語習得を不得手とする理由だとする前提は疑わしい。日本人の英語下手だった理由は、単一言語使用を正当化しようとする精神作用ではなかったかという疑問が浮かんできた。そうした精神作用のもとでは、ヨーロッパ型の複言語主義的な第二言語話者像は理解されない。しかし、日本人が求める第二言語話者像を具体的に調べた研究は管見の限り知らないし、本音の第二言語話者像を顕在化させることも難しいだろう。現在の日本における第二言語話者像を具体的かつ実証的に掘り起こし、さらにその第二言語話者像の今後の変化を予測することは可能か。これが、多層言語環境を対象とする後継研究としての本研究の核心をなす学術的な問いであった。

2. 研究の目的

本研究の着想は、前述の科研：基盤研究(B)(15H03221)で実施された国際シンポジウムでの、高雄科技大学(台湾)の黄愛玲氏・陳玖君氏による招待発表「台湾の言語政策現状と社会認識—語彙「国家言語」を中心に—」から得ている。台湾は、下関条約(1895)により日本に割譲されたので、終戦の1945年まで50年もの間日本の統治下にあったことになる。その後、日露戦争後の北海道で、日本語の通じないアイヌの高齢者が、当時まだアイヌ人口の3分の1いたことを知った。実際には50年に渡って多層言語環境にあったにも関わらず、日本人は日本語モノリンガルを貫いたことになる。島国日本に住む日本人の英語習得に対するルサンチマンという「多層言語環境研究」の前提的認識は誤謬であることに気づかされた。これが、本研究の着想の出発点であった。

本研究では、外国にルーツを持つ子供たちの継承語教育、広東語圏での言文不一致状況、

広東語圏での言文不一致状況、英語教育における協働学習など、様々な文脈でのトランスランゲージング事例の検討により、多層言語環境化の進展とそれがもたらす言語多様性の実情を考察した。その後、高度バイリンガルどうしのトランスランゲージング事例を文末表現、聞き手反応、意味交渉などの会話方略の視点で分類した。この分類に基づいて、会話方略のコード・スイッチングを操作した刺激会話ビデオを製作し、日本人英語学習者に質問紙調査を実施して反応を分析した。

すでに述べたように、世界規模で越境する人口動態は必然であり、日本も例外ではない。多層言語環境は、程度の差こそあれ、世界中どこでも好むと好まざるとに関わらず見られることになる。異言語話者、多言語話者の人口構成比上の増加に伴って、モノリンガル社会を志向する第二言語話者像からバイリンガル社会を志向するそれへと変化すると予測する。その変化は、私たち個々人の第二言語話者の言語パフォーマンスに対する印象の評価に現れるだろう。またその違いは、評価者の言語経験に関する属性に基づくはずである。なぜなら、多層言語環境的な言語経験は、バイリンガル社会志向の第二言語話者像をもたせると予測されるからだ。現在混在しているであろう第二言語話者像を、多言語話者のパフォーマンスに対する反応から推定することが本研究の目的である。

3. 研究の方法

CEFR を利用した教育手法、さらには、認定試験などの動きが加速している。しかしながら、日本では、4 技能に対しての研究は進んでいるが、第 2 言語の能力として必要とされる「言葉のやりとり(interaction)」や「仲介活動(mediation)」についての研究は進んでいない。また、外国語学習では、言語の機能の中で、「内容を伝達する(ideational function)」や「テキストの合理性を整える(textual function)」という外国語学習の機能が重視されがちであるが、「人間関係を調整する(interpersonal function)」という機能も実際の「言葉のやりとり」を行う時に大きな意味を持つとされる(Halliday, 1973, 2007)。

本研究では、第二言語話者のパフォーマンスの評価に影響を与える会話方略の項目として、次のようなものに注目した。一つ目は、日本語であればか、ね、よ、ねえなどの終助詞やそれに相当する語句、英語であれば right? や付加疑問などを指す文末表現と呼ばれる項目。二つ目は、ええ、はい、なるほど、本当ですか、uh-huh, I see, Is that so, Really? などの相槌や、ええと、あのう、まあ、um, well, I mean, let's see などのフィラーを含む聞き手反応と呼ばれる言語項目。三つ目は、言いたいことが言えない、言われたことがわからない場合に、やり取りを繰り返して問題解決を図る意味交渉である。

本研究では、トランスランゲージングにおけるこれらの会話方略の使用状況を、先行研究を参考にしながら考察し、そこに見られる特徴を分類した。データは、当初、留学生と日本人学生がタンDEM・ラーニングを行っている様子を録画して採取する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の時期が、このデータ収集の時期と重なったために、対面でのタンDEM・ラーニングによるデータ収集はできなかった。このため、日本語と英語の両言語において母語話者並みの運用能力を持つ高度なバイリンガルの対談動画を対象として、二言語併用の様子を分析し、分類を行った。なお、高度なバイリンガルどうしによる対話の場合、事前に予想した文末表現、相槌、意味交渉での言語の切替はあまり見られなかったため、これ以外の二言語併用についても考察の対象とした。また、これとは別に英語教育における協働学習場面でのトランスランゲージングを、情報の要求・情報の提供・意見に同意・理解の表示などの機能別に分類し、考察した。

以上の分析に基づいて、二言語併用の分類にもとづく言語運用を操作しながら評価者に見せる刺激会話ビデオを製作した。新型コロナウイルス感染拡大の影響から、実写での動画撮影は断念したが、代替案として、イラストレーションに音声を付ける形で動画を作成し、刺激ビデオとした。これを見せながら日本人英語学習者に質問紙調査を行い、これに対する理解度・違和感・反感の三つの観点から反応を収集した。当初、インタビューによるデータ収集も行う予定であったが、コロナ感染拡大の影響で質問紙調査に切り替えた。結果について、英語使用に対する自己肯定感や伝統型英語使用観の高低を評価者の属性として量的に比較した。また、これとは別に国際共修授業への参加者に対して PAC 分析を実施し、二言語併用に対する英語学習者の認識に対する考察を行った。

4. 研究成果

本研究の主な研究成果は以下の通りである。なお、本研究成果の詳細については「科学研究費補助金 基盤(B)「多層言語環境における第二言語話者像—トランスランゲージング志向の会話方略—」(課題番号: 19H01276) 研究成果報告書」として編集し印刷したほか、本科研ウェブサイト(<http://translanguaging.sakura.ne.jp/3tken/>)においてオンラインで提供している。以下に言及した論文は、その研究成果報告書に掲載した論文を意味している。

多層言語環境化の進展とそれがもたらす言語多様性の実情の考察について、まず述べる。外国にルーツを持つ子供たちの継承語教育の文脈では、トランスランゲージング・アイデンティティ・テキスト活用によるリテラシー教育で、批判的思考力や内的思考の発達が促進されることが示唆された。(佐野, 2024) 広東語圏での言文不一致状況の考察に基づいた日本人広東語教育の文脈では、言文不一致言語の学習でのトランスランゲージングテキスト活

用の重要性が指摘された。(飯田, 2024), 外国人労働力の増加を背景とした中長期滞在者に対する簡約日本語の文脈では, 言語簡略化にはその言語の国際語としてのディスコースが大きな影響を与えることが議論された(大友, 2024) 日本の学校教育における英語授業の文脈では, 協働学習を取り入れることで自発的なトランスランゲージングが発生し, それは単に英語運用能力の不足だけではない機能的な理由があることが確認された(酒井, 2024) 以上から, 日本及び東アジア圏での多層言語環境化と言語の多様性進行が確認され, トランスランゲージングを研究対象とする意義が示唆された。

以上を踏まえ, 高度バイリンガルどうしの会話の文脈においてトランスランゲージング的会話方略の分類が行われた。当初, 第二言語発達途上の学習者どうしによる自律学習, タンデム・ターニングによるデータ収集を予定していたが, 新型コロナウイルス感染拡大に伴う制約のため, 前述の通り高度バイリンガルどうしが会話する動画の二言語併用を考察対象とした。その結果, 両言語とも母語話者並みの運用能力を有する高度バイリンガルの場合, 言語知識の不足よりも話者が伝えたい内容への適合性が理由で言語資源が選択されるため, 文単位の言語変更の増加が見られた。また, その際に接続表現や適合性の高い言語選択をした単語を転換点として, 両言語間を行き来する方略が採られているらしいことが示唆された。さらに, こうした分類に基づいたトランスランゲージング使用の刺激ビデオに対する日本人英語学習者の反応からは, 予想どおり言語経験の多様さに合わせて受容性が増加する傾向も見られたが, 高度バイリンガルに特徴的な文単位のコード・スイッチングについては違和感を持つ傾向も見られ, モノリンガル母語話者規範への偏向が根強く存在することが示唆された。(河合・山田・小林, 2024) 多層言語環境に適用した第二言語話者像の変化は途上であるが, 高度バイリンガルの言語運用になじむまでには至っていないというのが, 日本人英語学習者の現状であるらしいことが見て取れた。

トランスランゲージングを外国語学習に取り込む教育移転に関する考察として, 国際共修授業参加により自己認識の変容が見られることが確認された(三ツ木, 2024) また, AI支援によるプロジェクト型外国語学習では, コミュニケーションに関わるコンピュータ技能への認知的な変容が成否の鍵を握ることが示唆された。(杉江, 2024)

以上はすべて, 応用言語学的な学術的意義を持つが, 社会的意義としては, こうしたトランスランゲージングへの知見が, CEFR で重視され始めてきている仲介技能, とくに変容型の仲介(transformative mediation)に対する理解の推進と, そうした仲介を担う仲介者の資質を検討する手がかりとなると考える。変容型仲介は, 対立するグループ間の交渉に単に情報伝達の仲立ちをすることで仲裁に貢献するばかりではなく, それぞれが互いの理解を深めるために両グループ自らが価値観を変容するように支援することで, 当事者が自律的に問題解決することを促進するアプローチとされる。トランスランゲージング推進者は, 言語種は存在せず, コミュニケーションをするための言語リソースとして話者が選択しているにすぎないと主張するが, トランスランゲージングの事象を説明するためには個別の言語種を用いなければ説明できない現実があり, 推進派自身も理論的な不具合として認めている。

今回, 高度バイリンガルの二言語併用では, トランスランゲージング推進派が主張するように, 話者本人は内容の伝達に意識があるのであって, 言語種に対する意識は希薄であることが, 言語種間の柔軟な往来に関係しているように思われた。一方, 現象的には言語種間をコード・スイッチしていることは事実であり, 接続表現などを転換点に異なる言語種を行き来していることが見て取れた。こうした言語種間の柔軟な往来を可能にしている背景には, 転換点となることが可能な両言語の接点に対する感覚的な理解があるように思われる。

第二言語話者の言語体系をどのように捉えるかについては, 深層部で基底を共有しているとする考え方と, 異なる言語体系が併存しているとする考え方あり, 近年は前者の考え方が優勢であるが, 高度バイリンガルのトランスランゲージング的言語運用を見ると, 表層部での柔軟な往来を可能にしている言語体系の変容的理解があるような気がする。二言語併用が行われているからと言って, 彼らの日本語や英語から派生したピジンやクレオールのような異なる言語を運用しているようには思われない。彼らの言語は, 二つながら一つのもののように使われている観がある。

このことは, 変容型仲介を考える時も, 対立する当事者が問題解決のために経験しなければならぬ自己変容を考えるうえで, 一つの示唆となるだろう。当事者たちのアイデンティティを保ったままで, 相手に対する理解を深めるための自己変容が必要となる。Transformativeという言葉は, transformative mediation(変容型仲介)ばかりではなく, transformative learning(変容型学習), transformative teaching(変容型教育), transformative tourism(変容型観光)などのように, 他の分野の用語でも用いられている。多様性がキーワードとなっている現代社会において, 種々の問題解決のために自己変容をいかにしてもたらずかが, これからの課題となっていくと思われる。本研究が, そのような変革・進化に向けて分野を超えたヒントとなることを切に願っている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 佐野愛子	4. 巻 683
2. 論文標題 「トランスリンガルな文学」と教育におけるその可能性	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 立命館文学	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 SAKAI Yuko	4. 巻 26(1)
2. 論文標題 Learners' Use of First Language in Small Group Discussions in a Japanese EFL Class: A Sociocultural Perspective	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism	6. 最初と最後の頁 83-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯田真紀	4. 巻 517(12)
2. 論文標題 広東語の "m4hai6/mai6...SFP" 構文	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文学報（東京都立大学人文科学研究科人文学報編集委員会 編）	6. 最初と最後の頁 145-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 SUGIE Satoko	4. 巻 -
2. 論文標題 The AI supported instructional design in PBL integrating Chinese language learning and multimedia creation	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Proceedings of the 31st International Conference on Computers in Education	6. 最初と最後の頁 746-752
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 IIDA Maki	4. 巻 -
2. 論文標題 The learning of Cantonese as a foreign language at Japanese universities	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Siu Iun Lee (Ed.), The Learning and Teaching of Cantonese as a Second Language . London/New York: Routledge	6. 最初と最後の頁 119-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉江聡子	4. 巻 11
2. 論文標題 観光・情報メディア・外国語教育を統合したPBL の教授設計の探究	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 複言語・多言語教育研究	6. 最初と最後の頁 62-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐野愛子	4. 巻 -
2. 論文標題 リテラシー教育におけるトランスリンガルな文学の意義 Translingual Identity Text の実践を支える理論的枠組み	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 科研(B)(課題番号: 19H01276) 多層言語環境における第二言語話者像 トランスランゲージング志向の会話方略 研究成果報告書	6. 最初と最後の頁 35-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 飯田真紀	4. 巻 -
2. 論文標題 言文不一致言語の外国語教育 日本語を母語とする香港広東語学習者を例に	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 科研(B)(課題番号: 19H01276) 多層言語環境における第二言語話者像 トランスランゲージング志向の会話方略 研究成果報告書	6. 最初と最後の頁 55-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大友瑠璃子	4. 巻 -
2. 論文標題 多層言語環境における言語簡略化 簡約日本語のディスコース計画	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 科研(B)(課題番号: 19H01276) 多層言語環境における第二言語話者像 トランスランゲージング志向の会話方略 研究成果報告書	6. 最初と最後の頁 71- 117
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 酒井優子	4. 巻 -
2. 論文標題 意思決定タスクにおける協働的対話の特徴 社会文化理論の視点から	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 科研(B)(課題番号: 19H01276) 多層言語環境における第二言語話者像 トランスランゲージング志向の会話方略 研究成果報告書	6. 最初と最後の頁 119-137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 河合靖、山田智久、小林由子	4. 巻 -
2. 論文標題 高度バイリンガルのトランスランゲージングと日本人英語学習者の反応	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 科研(B)(課題番号: 19H01276) 多層言語環境における第二言語話者像 トランスランゲージング志向の会話方略 研究成果報告書	6. 最初と最後の頁 139-180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三ツ木真実	4. 巻 -
2. 論文標題 多層言語環境における学びと学習者の認識 認識の変容とトランスランゲージング	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 科研(B)(課題番号: 19H01276) 多層言語環境における第二言語話者像 トランスランゲージング志向の会話方略 研究成果報告書	6. 最初と最後の頁 181-196
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 杉江聡子	4. 巻 -
2. 論文標題 外国語教育におけるマルチモーダルなコミュニケーションとAI の活用	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 科研(B)(課題番号: 19H01276) 多層言語環境における第二言語話者像 トランスランゲージング志向の会話方略 研究成果報告書	6. 最初と最後の頁 197-221
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計43件(うち招待講演 3件/うち国際学会 26件)

1. 発表者名 SANO Aiko, YAMADA Tomohisa, KAWAI Yasushi
2. 発表標題 Translanguaging in L2 teaching: Identity and mediation
3. 学会等名 多層言語環境研究国際シンポジウム「言語的変容の過去・現在・未来」(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 飯田真紀
2. 発表標題 広東語の談話標識"唔知口尼 M4zi1ne1"と日本語の応答表現「さあ(ね)」
3. 学会等名 多層言語環境研究国際シンポジウム「言語的変容の過去・現在・未来」(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 OHTOMO Ruriko
2. 発表標題 Discourse of "Easy Japanese": An update
3. 学会等名 多層言語環境研究国際シンポジウム「言語的変容の過去・現在・未来」(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 MITSUGI Makoto
2. 発表標題 The role of personal learning context in L2 motivation: Focusing on the emergence of new values and beliefs
3. 学会等名 多層言語環境研究国際シンポジウム「言語的変容の過去・現在・未来」(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 酒井優子
2. 発表標題 意見交換タスクに見られる scaffolding と言語使用のあり方
3. 学会等名 多層言語環境研究国際シンポジウム「言語的変容の過去・現在・未来」(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 杉江聡子
2. 発表標題 母語が異なるマルチリンガルの作品共創におけるマルチモーダルコミュニケーションを探る
3. 学会等名 多層言語環境研究国際シンポジウム「言語的変容の過去・現在・未来」(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 杉江聡子、三ツ木真実
2. 発表標題 タンデムラーニングにおけるトランスランゲージングを考える
3. 学会等名 多層言語環境研究国際シンポジウム「多様性と言語」(オンライン開催)(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 飯田真紀
2. 発表標題 中国語と日本語の<ジャナイカ>
3. 学会等名 多層言語環境研究国際シンポジウム「多様性と言語」(オンライン開催)(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小林由子
2. 発表標題 多層言語環境としての日本の大学と日本語学習者の「当事者性」
3. 学会等名 多層言語環境研究国際シンポジウム「多様性と言語」(オンライン開催)(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山田智久
2. 発表標題 タンDEM学習での使用言語を学習者はどのように決定しているのか
3. 学会等名 多層言語環境研究国際シンポジウム「多様性と言語」(オンライン開催)(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 TAM Chui Ling, KAWAI Yasushi
2. 発表標題 Classifying translanguaging interactions in YouTube videos and Podcast audio files.
3. 学会等名 多層言語環境研究国際シンポジウム「多様性と言語」(オンライン開催)(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 酒井優子
2. 発表標題 協働学習型意見交換タスクにおける学習者の使用言語と機能の量的研究
3. 学会等名 多層言語環境研究国際シンポジウム「多様性と言語」(オンライン開催)(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大友瑠璃子
2. 発表標題 映像メディアを使っでの授業実践 - 社会言語学の場合
3. 学会等名 公開学習会「トランスリンガルな文学を読む」(オンライン開催)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐野愛子
2. 発表標題 トランスリンガルな文学 - 温又柔氏の『真ん中のこどもたち』
3. 学会等名 公開学習会「トランスリンガルな文学を読む」(オンライン開催)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 河合靖
2. 発表標題 言語学習経験史と外国語学習観 理想のL2自己を求めて
3. 学会等名 北海道英語教育学会(HELES) 第21 回研究大会(オンライン開催)(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小林由子
2. 発表標題 大学での共修授業におけるメタ認知と批判的思考の養成
3. 学会等名 日本教育心理学会第62回総会（ポスター発表）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 杉江聡子
2. 発表標題 ハイフレックス型国際協同学習のデザインと学習成果 アイヌ文化の展示解説を事例として
3. 学会等名 第9回JACTFLシンポジウム「外国語教育の未来を拓く：世界とつながる複数外国語教育の展望」（オンライン開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 KAWAI Yasushi
2. 発表標題 Making Sense by Switching Codes in Tandem Learning
3. 学会等名 国際シンポジウム「アジア多層言語社会と複言語主義」（札幌，北海道大学）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SANO Aiko
2. 発表標題 Translanguaging: Its theoretical evolution and possible applications to language teaching in Japan
3. 学会等名 国際シンポジウム「アジア多層言語社会と複言語主義」（札幌，北海道大学）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 YOKOYAMA Yoshiki
2. 発表標題 How is translanguaging assessed and measured?
3. 学会等名 国際シンポジウム「アジア多層言語社会と複言語主義」(札幌, 北海道大学)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Iida Maki
2. 発表標題 Cantonese as a foreign language in Japan: Current situation and problems
3. 学会等名 International Symposium on Teaching Cantonese as a Second Language, 18 October 2019, The Chinese University of Hong Kong. (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 飯田真紀
2. 発表標題 広東語文末助詞“添”(tim1)の発話行為用法の獲得
3. 学会等名 国際シンポジウム「アジア多層言語社会と複言語主義」(札幌, 北海道大学)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山田智久
2. 発表標題 タンデム学習において学生は何に着目していたのか? 日英バイリンガルクラスでの実践から
3. 学会等名 国際シンポジウム「アジア多層言語社会と複言語主義」(札幌, 北海道大学)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小林由子
2. 発表標題 中級日本語学習者が日本語を母語とする学生との共修で学ぶ批判的思考 日本語プロフィエンスのからの検討
3. 学会等名 第1回日本語プロフィエンス研究学会国際大会（第12回OPI国際シンポジウム）（大連外国語大学）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 OTOMO Ruriko
2. 発表標題 Narratives of Japanese-Chinese bilingual BPO workers,
3. 学会等名 International Society for Language Studies, (Open University of Hong Kong) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 OTOMO Ruriko
2. 発表標題 Discourse of “Easy Japanese” : A preliminary language policy study
3. 学会等名 国際シンポジウム「アジア多層言語社会と複言語主義」（札幌，北海道大学）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉江聡子
2. 発表標題 AIを活用した多言語コミュニケーションの質的分析 ELANを用いた解析を事例として
3. 学会等名 国際シンポジウム「アジア多層言語社会と複言語主義」（札幌，北海道大学）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SAKAI Yuko
2. 発表標題 Learners' use of first language in small group discussion in a Japanese EFL class: A sociocultural perspective
3. 学会等名 国際シンポジウム「アジア多層言語社会と複言語主義」(札幌, 北海道大学)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SAKAI Yuko
2. 発表標題 Learners' use of first language in small group discussion in a Japanese EFL class
3. 学会等名 全国英語教育学会 第45回 弘前研究大会、2019年 8月
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 MITSUGI Makoto
2. 発表標題 English learning in a multilayered linguistic environment and development of the L2 motivational self-system
3. 学会等名 国際シンポジウム「アジア多層言語社会と複言語主義」(札幌, 北海道大学)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 サヴィヌィフ アンナ
2. 発表標題 モノリンガル社会におけるトランスランゲージングに関する信念～小学生に教える教師の考え～
3. 学会等名 2023 年度国際学術大会「地域文化の理解と日本学研究ネットワーク形成」(韓国安山市, 漢陽大学校)(国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大友瑠璃子
2. 発表標題 多層言語環境における言語簡略化：簡約日本語を通して見えてくること
3. 学会等名 多層言語環境研究シンポジウム「多層言語環境社会におけるCommunicationとMediation」(札幌, 北海道大学)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 佐野愛子
2. 発表標題 トランスリンガル・アイデンティティ・テキスト [実践報告]
3. 学会等名 多層言語環境研究シンポジウム「多層言語環境社会におけるCommunicationとMediation」(札幌, 北海道大学)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 飯田真紀
2. 発表標題 言文不一致言語の外国語教育 日本の広東語学習者を例に
3. 学会等名 多層言語環境研究シンポジウム「多層言語環境社会におけるCommunicationとMediation」(札幌, 北海道大学)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 酒井優子
2. 発表標題 意見交換タスクにみられる協働的対話の特徴
3. 学会等名 多層言語環境研究シンポジウム「多層言語環境社会におけるCommunicationとMediation」(札幌, 北海道大学)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 河合靖
2. 発表標題 多層言語環境社会への適応 - トランスランゲージング場面に対する日本人英語学習者の態度
3. 学会等名 多層言語環境研究シンポジウム「多層言語環境社会におけるCommunicationとMediation」(札幌, 北海道大学)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小林由子
2. 発表標題 国際共修授業における日本語母語話者の日本語使用意識
3. 学会等名 多層言語環境研究シンポジウム「多層言語環境社会におけるCommunicationとMediation」(札幌, 北海道大学)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 三ツ木真実
2. 発表標題 小樽商科大学 多層言語環境における学びと学習者の認識: トランスランゲージングと認識の変容に着目して
3. 学会等名 多層言語環境研究シンポジウム「多層言語環境社会におけるCommunicationとMediation」(札幌, 北海道大学)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 杉江聡子
2. 発表標題 観光教育 × 情報教育 × 外国語教育の統合型PBL の実践, 成果と課題
3. 学会等名 北海道大学研究集会2023: ポストコロナ時代の言語教育におけるオンライン授業と翻訳AI・生成AI への対応に関する研究(札幌, 北海道大学)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 酒井優子、志村昭暢
2. 発表標題 協働学習型意思決定タスクにおける学習者の発話機能の分析
3. 学会等名 北海道教育学会授業実践フォーラム（札幌，北海学園大学）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 杉江聡子
2. 発表標題 生成AI の時代に「中国語を教える」とは「何のために，何を，どうする」ことかを考える
3. 学会等名 2023年度中国語教育学会第3回研究会（オンライン発表）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 杉江聡子
2. 発表標題 学習者と共創する中国語教育を考える 協同学習としてのマルチメディア教材開発の可能性
3. 学会等名 第21回e-Learning教育学会大会（沖縄大学）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 河合靖
2. 発表標題 多層言語環境研究の歩み
3. 学会等名 2023 年度国際学術大会「地域文化の理解と日本学研究ネットワーク形成」（韓国安山市，漢陽大学校，オンライン講演）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小林由子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 27
3. 書名 国際共修授業 多様性を育む大学教育のプラン（青木麻衣子・鄭惠先編著・第4章「多様性を資源とする批判的思考の育成」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大友 瑠璃子 (OTOMO Ruriko) (10815939)	北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・准教授 (10101)	
研究分担者	佐野 愛子 (SANO Aiko) (20738356)	立命館大学・文学部・教授 (34315)	
研究分担者	小林 由子 (KOBAYASHI Yoshiko) (30250517)	北海道大学・高等教育推進機構・教授 (10101)	
研究分担者	酒井 優子 (SAKAI Yuko) (40780218)	東海大学・国際文化学部・教授 (32644)	
研究分担者	飯田 真紀 (IIDA Maki) (50401427)	東京都立大学・人文科学研究科・教授 (22604)	

6. 研究組織 (つづき)

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	三ツ木 真実 (MITSUGI Makoto) (80782458)	小樽商科大学・言語センター・准教授 (10104)	
研究分担者	山田 智久 (YAMADA Tomohisa) (90549148)	西南学院大学・外国語学部・教授 (37105)	
研究分担者	杉江 聡子 (SUGIE Satoko) (90795048)	札幌国際大学・観光学部・准教授 (30116)	
研究分担者	横山 吉樹 (YOKOYAMA Yoshiki) (70254711)	北海道教育大学・教育学部・教授 (10102)	2020年度より、管理職就任にて業務多忙のため分担者から外れる。

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	サヴィヌィフ アンナ (SAVINYKH Anna)	北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・研究員 (10101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計4件

国際研究集会 「地域文化の理解と日本学研究ネットワーク形成」 地域文化と多層言語環境研究	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 多層言語環境研究国際シンポジウム「言語的変容の過去・現在・未来」	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 多層言語環境研究国際シンポジウム「多様性と言語」(北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院主催)	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 国際シンポジウム「アジア多層言語社会と複言語主義」(2019年11月3日, 北海道大学学術交流会館, 札幌)	開催年 2019年～2019年

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------